

全身麻酔下歯科治療症例の予後追跡調査

○江藤 順, 矢野里香, 藤瀬多佳子,
柳田憲一, 立川義博, 中田 稔
九大・歯・小児歯

目的：障害児を歯科治療する際に、行動管理の手段として全身麻酔(以下全麻と略す)を利用することがある。このような全麻症例では、協力度不良により外来治療が困難なため、全麻下歯科治療の予後不良が生じないように最大限の配慮をしなければならない。そこで、全麻下歯科治療方法の改善に資するため、最近4年間に当科で行った全麻下歯科治療の予後、ならびにその後のう蝕新生状況について調査した。

対象と方法：1989年以降、当科で全麻下歯科治療を行った80名について、全麻治療後12カ月間における予後追跡調査を行った。そして、歯種別(乳歯及び永久歯)、部位別(前歯部及び臼歯部)、処置内容別(歯冠修復並びに歯内療法)に分け、それぞれの治療予後について検討した。又、同時に新生う蝕の発生状況についても調査した。

結果：①歯冠修復の予後をみると、乳犬歯の乳歯冠がもっとも予後が不良であり、摩耗による破損・脱離の発生率は全麻後3カ月ですでに14%であった。

②次に予後不良だったのは、前歯部コンポジットレジン修復であり、破折・脱離の発生率は全麻後3カ月4%、6カ月6%、12カ月11%と徐々に増加していた。

③乳臼歯部、永久前歯部及び臼歯部での予後不良の割合は、治療内容に関わらず全麻後12カ月において2%以下であった。

④歯内療法の臨床的な予後不良例は認められなかった。

⑤新生う蝕の発生は1人平均0.3歯面以下であり、その約70%を隣接面う蝕が占めていた。

4番染色体長腕部分欠失の一症例

○塚本末廣 武内哲二 平塚正雄
伊藤かがり 永尾伊都子
福岡歯科大学高齢・障害者歯科学講座

福岡大学医学部小児科において本邦第一例の4番染色体長腕部分欠失と診断された症例について観察する機会を得たので報告する。

【症例】13歳, 男性

【初診】1993年5月10日

【主訴】う蝕治療

【家族歴】初診時, 父は46歳, 母は42歳で共に健康であった。血族結婚ではない。同胞は3人である。患児は第2子。第1子の男児は下垂体性小人症と診断されていた。第3子は女兒で正常に発達している。

【既往歴】在胎37週 2,568g 自然頭位分娩にて出生。出生直後より大泉門が大きかった。9カ月のとき痙攣発作が頻発。抗痙攣剤の服用をして10カ月以後, 痙攣はコントロールされている。生後5歳4カ月のとき, 高精度分析法Gバンドにて46XY del(4)(q13.2, q21.3)と確定された。

【全身所見】身長105cm, 体重16.8kgで標準より著明に小さかった。四肢短小, 前額部突出, 耳介低位を示し, 精神発達遅滞を伴っていた。

【口腔内所見】口蓋は浅く, 平坦であった。模型診査よると上下顎とも空隙歯列であり, 永久歯の歯冠幅径が著しく小さかった。第二乳臼歯が4歯とも残存していたが, 後継永久歯の萌出も認められた。永久歯はエナメル質形成不全を伴っていた。

【X線所見】下顎第二乳臼歯の歯根は吸収されずに, 第二小臼歯が萌出しているのが認められた。